

地域観光の活性化を担う人材育成を目指した本校の教育活動

～OPENプロジェクトを活かした地域との連携～
北海道小樽未来創造高等学校 学級数 12 (校長 伊藤 良平)

1 学校概要及び本校と小樽市の現状と課題

「小樽運河」をはじめとした観光都市小樽にある本校は、平成 30 年度に北海道小樽商業高等学校と北海道小樽工業高等学校の統合により創立した本道初の単位制専門高校である。商業科は「流通マネジメント科・情報会計マネジメント科」、工業科は「機械電気システム科・建設システム科」の 4 学科 4 間口で、全校生徒は 426 名である。

小樽市は観光業を基幹産業としている全道有数の観光都市であるが、毎年 3 千名程度の人口減少が進んでおり、現在の人口は 11 万 3 千人である。平成 20 年に観光都市として「小樽観光都市宣言」を行った。これは観光客に対して、市民全体でおもてなしを行うことを目指しているが、現状では目標達成には至っていない。そこで小樽市の要請を受け、前身の小樽商業高校から学校設定科目「観光一般」において、小樽市の歴史や文化を学び、観光客へのアプローチを行う環境づくりに取り組んでいる。

2 「高等学校OPENプロジェクト」への参加

平成 30 年に、学校教育活動を通じて地域の課題を見つけ、その解決策を考える北海道ふるさと・みらい創生推進事業「高等学校OPENプロジェクト」の参加校が募集された。前身の小樽商業高校の時代から、小樽観光協会など多くの外部団体と連携体制を築き、積極的な校外活動を行ってきた経験を活かしながら、新設校として本校独自の活動を模索していたため、このプロジェクトに参加意思を表明し、プロポーザル審査を経て、研究指定校として指定を受けた。小樽市の基幹産業である観光分野を中心に、商業科の知識や技術を実際に活用していく取組の中で、生徒自身が小樽市の現状や課題に直面し、その解決策を見出だそうとすることが、将来の小樽を担っていく人材育成につながる貴重な経験となると考えた。

3 実践目標

本校の育成を目指す資質・能力は以下のとおりである。これらの力を身に付け、成長することを目的として、商業科としては「高等学校OPENプロジェクト」の取組が目的に合致すると考えた。

- (1) 専門性を生かし、職業人として社会に貢献する力
- (2) 協働・敬愛の精神を持ち、誠実に取り組む力
- (3) 夢と希望に満ちあふれ、新しい価値を創造し未来を切り拓く力

平成 30 年度から「高等学校OPENプロジェクト」研究指定校となり、3 年目を迎えた今年度は教育課程の完成年度に伴い、地域との連携に基づく本校の教育活動の一連の流れを完成させることを目指していた。しかし、新型コロナウイルスの影響を受け、学校外での活動がすべて中止という状況となった。今年度は、次年度以降も継続していく取組に関して、活動内容の見直しと改善点の検討を進めていく予定である。

4 実践概要

(1) 学校外組織との連携に基づくイベントの運営・参加

ア 外国人観光客を対象とした日本文化の紹介及び体験「お茶会」

小樽を訪れている外国人観光客を対象とし、日本文化の体験を目的とした「お茶会」を2日間実施した。会場は、小樽運河に面する堺町通りの「利尻屋みのや」の建物である「不老館」を提供していただいている。

会場付近を散策している観光客に向けた案内や呼びかけ、実際にお茶を飲む手順等の説明を、生徒は英語で行った。

事前指導として英語科と連携し、「ビジネス基礎」の授業において、生徒同士がそれぞれの役割をロールプレイで担当しながら、お互いのアプローチの仕方について指摘し合い、シミュレーションを行った。

観光客へのアプローチの中で、生徒は観光客から記念撮影を依頼されたり、他の観光地や歴史的建造物に係る質問に答えたりするなど、生徒のコミュニケーション能力の向上につながった。

また、お茶を提供する際に、和菓子を乗せる懐紙については、小樽高等支援学校に牛乳パックを使用した再生紙の作成を依頼するなど、学校間連携も併せて行った。



イ 小樽市最大のイベント「潮ねりこみ」

夏の小樽市を彩る祭典の「潮まつり」における、最大のイベントであり、北海道内でも古い

歴史をもつイベントである。例年6千人以上の参加者が集まる「潮ねりこみ」に商業科の生徒を中心として参加した。事前指導として、



実際に振り付けを考案された日本舞踊の藤間扇玉先生を外部講師として招き、潮ねりこみの練習に合わせて、踊りの歴史や振り付けに込められた想いや意味を学ぶなど、小樽市民が子どもの頃から参加していた「潮まつり」の成り立ちや歴史的背景など、「潮まつり・潮ねりこみ」の歴史的価値を改めて学ぶ機会となった。



また、建設システム科「課題研究」において山車制作を担当するなど、学科間連携の体制を

敷いており、次年度に向けて、機械電機システム科が山車のLED装飾について検討している。

ウ 小樽産蝦蛄のブランド化を目指した「小樽しゃこ祭」



秋には、小樽産蝦蛄のブランド化を目的とした「小樽しゃこ祭」に参加した。蝦蛄は高級食材として知られているが、小樽市民にはあまり普及していない現状がある。最初に興味関心をもたせる方法として、祭のマスコットキャラクターを用いた塗り絵を生徒がデザイン・作成し、市内の幼稚園・保育園で配布し、色を塗り完成した作品を会場に掲示することで、祭のPR活動を行った。この塗り絵に使用した紙も、小樽高等支援学校と連携し再生紙を使用した。

また、蝦蛄の生態展示を行い、実際に触れてみる機会を用意することで、特に子どもたちの関心を集めることができた。PR活動の一環として、オリジナル缶バッジの制作・販売も行った。

さらに、高校生が商品開発した「シャコ煎餅」を会場で製作・販売したが、この商品を目的に来場するリピーターができるなど、来場者には好評であった。



エ 市民レベルのボランティア活動が中心となった「小樽雪あかりの路」

小樽の冬の名物として、国土交通省「手づくり郷土ふるさと賞大賞部門」を受賞した「小樽雪あかりの路」に、全学科の1年次生が紙コップでローソクカップを制作し、学校の正門前に設置した。また、試験的な取組として、プロジェクションマッピングを校舎に向けて投影した。今後、生徒の作品を小樽市内の歴史的建造物に投影することを検討している。



オ 「おたる案内人検定」

小樽市は観光都市として全国的にも高い知名度を有している。観光産業は、小樽の基幹産業として成長し、本市経済に大きな効果をもたらしており、小樽の魅力に触れる機会の増加を目的として、産学官により「小樽観光大学校」を設立し、小樽観光の本質を捉えた人材育成を目指した資格を運営している。

観光業に携わる多くの地域の方々が検定を取得し、観光客へのおもてなしに役立てているため、本校の2年次「観光一般」の授業の一環として位置付けた。この検定に向けた取組の成果として、次年度以降は、3年次「課題研究」などの授業において、観光ガイドのボランティア活動なども視野に入れた活動を計画している。

(2) 総合的な探究の時間「小樽学」との連携

本校は、1年次「総合的な探究の時間」の授業を「小樽学」と位置付け、商業科・工業科・共通教科それぞれの視点から地元小樽に関する歴史や文化、特徴などを学ぶ機会を設けた。前述し

た「潮ねりこみ」の練習や「小樽雪あかりの路」のローソクカップの制作は、「小樽学」における取組として実施した。

また、本校の教員に留まらず、小樽市内のそれぞれのスペシャリストを外部講師として、次のような内容で講演や演習などを行った。

【「小樽学」実施内容一覧(令和元年度)：一部抜粋】

回	日付	内容	担当	概要 (実施時数)
4	7/17	潮ねりこみ 踊りの練習	商業	4クラス、体育館で合同実施(2) 外部講師：藤間扇玉 氏(日本舞踊師範)
9	10/16	小樽の町づくり 歴史的建築物の視点から	建設	クラスごとに講演(1) 校外のフィールドワーク(1)
10	10/23	B-1 グランプリの取組 あんかけ焼きそば調理	実行 委員会	クラスごとに実施(2) 外部講師：小樽あんかけ焼きそば親衛隊
18	1/29	雪あかりの路 ローソクカップ制作	商業	クラスごとに実施(1) 紙コップ、公式ローソク (人数分準備)
19	2/12	雪あかりの路 校門前にローソク設置	商業	商業科・工業科1クラスずつ実施(1) ローソク設置、雪像制作
21	3/11	卒業生講話(カフェ店主) ～夢の実現に向けて～	実行 委員会	4クラス、体育館で講演(1) 外部講師：中源博幸 氏(「石と鉄」店主)

5 活動の成果と今後の課題

「高等学校OPENプロジェクト」をはじめとした様々な活動を通じて、生徒は自分の考えを他者に対して伝えられるようになった。また、小樽観光協会などの外部団体が主催している取組にも積極的に参加する姿が見られるようになった。

今後は、校外活動の取組が多い中で、小樽市の魅力を効果的に発信するために、どのように活動を発展していけばよいのか、具体的な方策を検討することが課題である。また、活動ごとの目的や達成基準に関して、それぞれが効果的に連携されていないことが課題として挙げられる。そのため、活動対象に対する「誰に・何を・どのようにするのか。」を整理した上で、活動の目標を関連させる必要がある。

活動対象の設定に関しては「地域住民」及び「観光客」の差別化を明確にし、それぞれの活動が重なる点を洗い出し、そこに至るまでのアプローチを含めた全体的な運営計画を新たに作成していく。その活動と併せて、地域には本校の教育活動を知ってもらい、更に地域が抱える問題解決の一助とするためにも、地域の多くの方々が本校に対して求めているものを、分かりやすく発信・提供していくことが重要である。

